

第十回九州戯曲賞 最終審査員選評

岩崎正裕

候補作5本を一息に読んだ。いずれの作品にも独特の息遣いがある、なるほど「九州」の名を冠した戯曲賞であるなど刺激を受けた。

川口大樹さんの「甘い手」は、高校生たちと先生、そのコミュニティを描く青春コメディ。いくつかのパートが折り重なって、ラストの「ショウ・マスト・ゴー・オン」な幕切れへと繋がる。明快なドラマの運びは、作者が信じる演劇そのものなのだろう。そこにはブレがなく眩しさすら感じてしまう。13名の登場人物を役割を持たせて作中で動かすには大変な力量が必要だ。そのパズルを組み上げる集中力には感服する。タイトルに「甘い手」とあるが、「甘い」の背景に辛味と苦味が用意されていれば、と悔やまれる。「賞」と名の付くものは、他作品との差異や深みが吟味され議論となる。そんな意味で大賞には一歩及ばなかった。

馬場佑介さんの「カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏」は企みに満ちた作品。冒頭では共同生活を始める女性と女性の対話に男性が加わる。ひよんなことから男性も同居を始める。と、ここまではまったくスタンダードな戯曲の滑り出し。三人で暮らし始めたところへ、ネコさんと呼ばれる先輩が現れる辺りから、徐々に様相が変化する。中盤以降、共同生活に入った亀裂から、一人、また一人と登場人物が消えてゆく。何の説明もなく。出だしがリアルな対話劇だから混乱するが、これはSNS上で問題を起こしたアカウントが停止されるようなものか。序盤と終盤の劇の手触りの違いには興味を引かれたが、私にはそれ以上の読み解きが出来ず残念だった。

穴迫信一さんの「眺め」は、言葉の取り扱いについて丁寧で繊細で、好ましく読めた作品。審査会では、「日差し」や「森」「せかい」などの役名から、壮大な物語を想像したとの声も多かったが、パーソナルな対話の連続は心地よい。特に「せかい」のモノログには惹き付けられた。個人の記憶にある時間の連続性のようなものが、あっさりと裏切られ更新されて、浮遊感を伴う世界に溶け入ってゆく。言葉でドラマを構築しようとする作者の方法論が光る。ただ、この戯曲を上演しようとした場合どうなのか。私には、この作品が文字として完結しているように思われた。それは素晴らしいことなのだが。

日下渚さんの「漣—さざなみ—」を、私は大賞に推した。大分にある「宇宙港」を取り巻くコミュニティを軸に、夢の中の日本兵と宇宙飛行士の存在から歴史と未来までをも描く。登場人物の年齢設定も18歳から70歳までと幅広く、その対話にも嘘がない。母と子の時間をかけた回復のドラマでもある。演劇作品というものは、逆説的にグロテスクに書かれるにせよ、最終的には人間の生が、賛美されるものと思っている。日下渚さんの本作を貫く想いは、まさにこれだろう。地域で演劇を続けていく上では、このような作品が財産となる。

長く作品を発表されていくことを願わずにはいられなかった。

大賞は、中島栄子さんの「モルヒネ」に決定した。発達障がいの父、そのストレスで重篤の母、看病する娘も連鎖する障がいに苦しむ。一読して、描かれた世界の本物の手触りに驚愕した。一方で、これは一定の距離感を保った取材等から得られる作品ではないだろうと直感した。ラストに小さな希望は描かれるが、大半は苦しみの声に溢れる。当事者性の強い作品で、生涯に一度書かなければならないものとして理解できる。但し、舞台劇の台本として、技術を身につける必要はあるように思えた。上手と下手を分けて、別の時間と空間を交互に見せる方法は劇の密度を損なうように思われる。この作品もまた、上演されて真価が問われるのだろう。

以上、選評として、候補作5本について書かせていただいた。どの地域にかかわらず、コロナ禍にあって、演劇上演についても大きな打撃を受けた。しかしながら、「九州」においてこれだけ読みごたえある作品が生まれたことを喜びたい。また、この場を作っていただいた九州戯曲賞に係わるスタッフの皆様にも、改めて感謝を申し上げたい。

松井 周

【甘い手】

文化祭直前の高校における群像劇。先生も生徒たちも文化祭に向けて、演劇や出し物の完成を目指すという設定のわかりやすさは勢いを生んでいます。しかし、教師と生徒の間にあまり境界がないことが人間関係を平坦にし、基本的には同じ仲間の内輪感に包まれています。ただ、その狭いフレームの中で、縦横無尽に登場人物たちが動き回る様にリズム感があり、小気味良かったです。飼っているウサギの手の匂いから、ラストの手の動作とタイトルにつながる構造は成功しているように思いました。その作劇の姿勢には、中途半端な破綻を求めず、きちんと話の輪を閉じる意志を感じます。また、作品の傾向がつくり手と観客の間に過不足なく共有されていることもポジティブに想像できました。しかし、この設定上の内輪感と想定内の観客に向けて提示されている感覚はシンクロしており、この戯曲が想定する観客の外側や反対側にいる観客に何かを届かせるような仕掛けや問いのなかったところがこの作品のもう一步欲しいと思わせる弱さにつながっていると思いました。

【眺め】

腑に落ちるようないくつかの台詞があり、言葉を練る力も確かなものだと思います。しかし、その台詞は、登場人物それぞれの独り言として閉じているように感じられ、作品世界を想像するのが難しかったです。メタバースのようであったり、記憶の世界を行き来したりできる世界なのかと考えたり、人の名前に「日差し」や「森」「や」「春望」「ノミ」とあることから、環世界（種によって異なるその種特有の環境があるということ：大辞泉）を描こうとしているのかもしれないと読み進んでみても、そのようなスケール感を含んでいるよう

には思えませんでした。「どういう世界なのか？」という疑問は、言葉のイメージ力がもっと強かったならば、大して気にならないとも思うのですが、イメージのリレーがそこまでうまく行っているようには思えませんでした。なので、基本的には人間関係の問題に終始しているように感じられました。もちろんそれでも構わないのですが、だったらなぜここまで世界を複雑化したのか、意図がわからなくなりました。途中に出てくる「アシダカグモ」という存在は人間とは違った知覚で世界に対応している部分が面白かったですが、それでも擬人化が過ぎるように思えました。また、「せかい」という登場人物の語るエピソードは単体で面白いし、他の登場人物とは位相の違う場所にいる存在として注目していたのですが、その違いが戯曲にどのような効果をもたらしているのかがわからずじまいでした。

【カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏】

女性二人と男性一人が同居生活を始めるという冒頭の流れは非常にクリアでスムーズに進みます。そこで三角関係のような成り行きになるのかと思いきや、後半は詩織という三人のうちの一人の内面世界にスライドしていくように思えました。これが効いているわけではなく、この作品の弱さだと感じました。一貫していればいいということを出したいのではなく、スライドさせることで、例えば急速に作品世界が貧しくなっていったとしても、それが詩織という人物の特異性をあらわにできるほど書き込んであるならば、そこからまた作品世界が広がりを持ったのかもしれない。しかし、作者の思惑として（登場人物の行動ではなく）、途中から世界を消去しているかのように感じました。それを劇中で「大人じゃないんだよ」と指摘して片付けてしまうのは、ちょっと都合がいいかもしれません。どうしても体力切れに思えてしまいました。

【漣—さざなみ—】

年齢に幅のある人物の書き分けやそれぞれの関係性がよく見えるように構成された部分は、ややステレオタイプでありながらも、優れていました。しかし、その内容に関しては、「宇宙」というものを媒介にするには、やや単純であったように思います。主人公が「星が綺麗」という「綺麗事」に対して「宇宙開発」の競争や「軍事利用」というものに言及しながらも、かなり強引に「未来は明るい」という方向に物語の収束が進んでいくことに、バランスの悪さを感じました。「宇宙」に願いを込めることは誰にでもあることで、そこに希望を見出すこともあるでしょうが、「宇宙」を人間の想像力の範疇で矮小化しているように感じました。人間が都合良く「宇宙」を解釈することと、「宇宙」の存在は全く別のものです。せめてそのようなこの作品世界からは部外者となるような人物の視点が存在していたら、この作品の見方も変わったのでは？と感じました。

【モルヒネ】

死を前にした母や発達障害の診断を受けた父との会話を中心にしたシンプルな構成です

が、台詞のやり取りに惹きつけられました。「他者」であると同時に「自分」の延長としても存在するような家族を、安易な解決に導くことなく、丁寧に描いていたと思います。「三角コーナーの網」の入ったダンボールが大量に置いてあったり、「怒鳴り散らしながら足を踏み鳴らす」さまなど、小さな過剰が舞台上に表現されることで、身体や空間とのつながりが具体的にイメージされているのがわかりました。ただ、ラストは急いでいるような密度の粗さを感じました。その直前に主人公から母への告白がありますが、そこからラストへの流れがやや強引だと思いました。主人公がどのような行動をしていくのか、もう少し追ってみたかったです。とはいえ全体的には、作者の「問い」が鮮明に登場人物たちの台詞に反映されていて、読者も観客もその「問い」について思いをめぐらさざるを得ない力を持った作品でした。受賞、おめでとうございます。

岡田利規

「眺め」について。

候補作本編に目を通す前に、その巻頭に付された表紙に書かれた(作品のあらすじまたはねらい)というテキストを読み、とてもわくわくしました。射程のとてつもなく大きなコンセプトが示されていたからです！そして本編。登場人物の名前が「日差し」「森」となっていることにもわたしはわくわくしました。わたしはそういう名前の人間のせりふとしてではなく、まさに日差しが、森がしゃべっているせりふなのだとして読むとうとしました。そのようなことをたくらんでいる戯曲だったらなんておもしろいことか！と思っていたからです。勝手な期待を抱いていただけとも言えます。そのわたしの読み方は、早い段階で破綻をきたしました。どうやらかれらは人間みたいだということがはっきりしてきたからです。そのことでわたしは——繰り返しますが、勝手なこととは承知しています——興奮が冷めてしまいました。彼らが人間であるとして読み直してみたときにわたしに浮かんだ疑問は、本編の内容それ自体が(作品のあらすじまたはねらい)に書かれているコンセプトに沿ったものであると思うことができないということでした。そこでわたしはコンセプト文に囚われるのもやめてみることにしました。虚心に読んでみたのです。すると、ここに何が書かれているのか、何を書こうとしているのかがよくわからなくなってしまいました。つまり、このテキストは示されたコンセプトにまったく関連していないというわけではないのです。けれどもその関連がなにかしかりした一定以上のものであるとはわたしには感じられず、そんなこんなでこのテキストを掴みとれきれなかった次第です。ときどきインターロードとして作品に割り込んでくる〈せかい〉というキャラクターの語るモノローグは、審査会においてももっぱらおもしろいという評価でしたしわたしもそう思いました。けれども作品の他のパートとの関わりがわたしには、これもよく掴めず、また、そんなこと掴めなくてもべらぼうにおもしろいんだから別にいいよ、という気になれるほどにはおもしろいと思えたわけでもなく、もしもこの〈せかい〉のモノローグを抜き出しただけの作品であったと

したら、その場合のほうがずっと自分が自信をもって評価できるものであったらうな、とは思いました。ただしそれでは、(作品のあらすじまたはねらい) に書かれたコンセプトとの関わりはほとんどなくなってしまいますので、それはそれでとても残念なのですけれども。

「漣—さざなみ—」について。

登場人物がみんないい人で、いやなやつが出て来ないのはつまらない、という意見が審査会では出ました。なるほどそうだな、と同意します。でもわたしは、それは別に気にしたり改めたりしないでもかまわないと思います。わたしが思ったことは、作中人物たちが、この作品をこっちの方向に持って行きたいという作者の意図に従順すぎるような気がするということです。その意図と無関係に、ときには刃向かうように、そのときに言いたいことをキャラクターは言うことがあります。そういう言葉がもっともっとあつたらおもしろいと思います。

「カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏」について。

この作品についてもわたしは作中人物から、作者がこうなってほしいというふうに話し行動している度合いが強いという印象を受けました。おそらくそれゆえに、わたしはキャラクターたちの欲動を、それを目の前にする読者/観客として問題にすることができないでおわってしまいました。

「甘い手」について。

ここに書かれている言葉は、おもしろいと思いました。おもしろい言葉が書かれているとき、それは——たいていの場合は、ですが——それを書いた人がそれをおもしろいと思っているということです。つまり、面白い言葉がそこにあるとき、そこは、作者がどういう言葉をおもしろいと思っているかということがわかりますし、それが問われる場でもあります。この作品の中でおもしろがられている言葉の質は、そういうセンスがわたしたちの生きているこの場——ざっくりと、現代の日本、とでもここでは言うことにしますが——にはすでに存在している、そしてすでにある程度じゅうぶん機能しているものであるように思います。そしてこの戯曲の上演の場は、そのおもしろさを再確認するようにおもしろがる、という場となるのだろうか、というように想像しました。もちろん、それはじゅうぶんにおもしろい上演なのですから、それでよいのです。ただし、わたしは作家は新しいおもしろさの質の言葉を作り出せたほうがよいと思っていますので、その意味でこの作品の言葉を必ずしもポジティブに評価できませんでした。でも、おそらくはこのことと同じことを別の角度から、肯定的なニュアンスを込めて、この作品を楽しむ観客にとってのマイナスとなる要素がこの作品にはない、と評した審査員がいました。その見解には納得します。わたしは、この作品の中にシーン——つまり、場所——とのかかわりの中で生まれるおもしろさがもっと多かつたらよかつたのではないかと思いました。たとえば、自動販売機のシーンにはそ

うしたおもしろさがあって、ここはすばらしいとわたしは思いました。

「モルヒネ」について。

わたしは今回、この作品を推しました。せりふに納得がいったことと、演劇という、人前で何かを演じる——つまり、やってみせる——という形式の力が発揮されるような構造になっていると感じられたことが理由です。たとえば、仏前の祖父に向かって語る、何かを言い返してくることにすでない、モルヒネで意識が朦朧している母に向かって語る、それらはどちらも語りの形式としてはモノログなのですが、モノログと自覚することなく人間はふだんの生活の中でそのように話すことがあるということを出してみせているところなどが、とても演劇的でわたしにはおもしろかったのです。

市原佐都子

私が評価したい作品は、①言葉が魅力を持っているもの（例えば、表現にオリジナリティがある、イメージが喚起されるなど）、②作家がそれを書くことへの切実さを感じられるもの、③そこで扱われている事柄が社会で提示される意義を感じられるもの、です。その点から、私は『眺め』と『モルヒネ』の二作品を推しました。

『眺め』は、どの作品よりも言葉に魅力を感じた。すでにある誰かのことばではなく、自分の世界の捉え方に合うことばを探している。どこを読んでもその跡を感じることができた。「せかい」という人物の語りもドライブ感があり楽しめた。しかし、いろいろな出来事や登場人物がなぜ存在するのか、彼らがどういう作用をなしているのか、疑問な部分はたくさんあり、もっとそれらがうまく働いていると受け取ることができればこの戯曲の評価が高まることに繋がったと思う。そもそも、どうしてこの劇中の人物たちは絶望しているのだろうか。この劇で世界はどうなっているのだろうか、その舞台設定も曖昧でよくわからない。ただ、「なんとなく」スケールの大きさは感じる。個人がいま生きているなかで目の前の問題をどう解決するのかという物語ではなく、もっと大きな時間の捉え方のなかで、この人物たちは存在しているのか。私達の捉えられない時間のなかに私達はおり、大切なものは簡単には消えずどこかに在り、心配することはない、というようなことが言いたいのかなと思った。という感じで、「なんとなく」この作品の言葉に魅力を感じていても、演劇として優れているといえる箇所をみつけることができなかつたので、戯曲賞としては最後に強く推すことができなかつた。しかし、まだかたちにされてない何かをかたちにしようとしている姿勢を感じ、好感を持った。

『モルヒネ』はまず、書かれている事柄のリアリティが非常に強く、出てくる小道具やエピソードから、光景や匂いが浮かぶような強いイメージを持ちながら読み進めることができた。どの作品よりも作家の書くことへの切実さを感じた。主人公は大人になってから発達障害と判明して悩むのだが、「通常」や「異常」と判断されるあいだにいる、「通常」のようだ

し「通常」ではないとされる人、語られることのまだ少ない人の声を書いている点でこの作品の存在意義を感じた。審査会のなかでは、他の審査員のこの戯曲のお葬式の回想の場面が、「演じる」という行為を見せることができる場面として演劇として優れているという話がされ、それは共感のできるのだった。ただ、ラストシーンは急に終わったような感じがあり、エピソードが語られるのみで登場していない主人公の恋人との今後の示唆されるのだが、その恋人についてももう少し掘り下げてくれないとちょっと納得ができない感があった。まだこの戯曲は上演されてないときいたので、上演されることで、稽古のなかでブラッシュアップされることもあるだろうし、観客の間で議論が生まれ得る作品だと思うので、上演されることを期待する。

『漣—さざなみ—』は、たくさんの登場人物がそれぞれ書き分けられていて、物語としてもうまく書かれているという評価が他の審査員からあった。それには少し共感する反面、私自身がうまく書くことを重視していないため評価できなかった。星はこの物語のなかで重要なモチーフのはずだが、劇中の星に関する捉え方、そしてその語られ方も、既存のものである感じがして、面白さを感じなかった。

『甘い手』も登場人物が十人以上出てくるのだがたくさんの登場人物がかき分けられているというよりも、全員単純化され、似ているように感じた。出てくる話題が現代の高校生より古い気がする。過去の設定にしているのかと思ったが、読み直すと、ウーバーイーツなど出てくるのでそうではないようだ。作者の年齢で書きやすいことを書いているように感じる。

『カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏』は、正直よくわからないという印象だった。よくわからないことが悪いと言いたいのではなく、よくわからなくても面白いと感ずることもある。言葉の力や、作家のこれを書くことへの切実さが感じられなかったためだと思う。

中島栄子さん、おめでとうございます。

幸田真洋

僕は穴迫信一さんの『眺め』と中島栄子さんの『モルヒネ』を推しました。とはいっても、最初『モルヒネ』はやや消極的でした。読んだ時の切実さは『モルヒネ』が一番で、ドスンと心に来ました。が、作劇の技術的なところでやや引っかかりがあり、間違いなく大賞！と強く推しにくいところがありました。一方、『眺め』は上手に書けているように見えました。たとえば『モルヒネ』は冒頭、主人公の貴美子と母が病室で会話しているところから始まります。この会話はとてもリアルでぐいぐい引き込まれていったのですが、シーンの終わりで貴美子のモノローグが挿入されます。昔の演劇的な（と言うと失礼ですが、率直に言った方が伝わると思うのでご容赦ください）、主人公だけに照明が当たり、心情や状況説明をするタイプのものです。昔の演劇がダメかと言うのももちろんそんなことはありません。が、戯曲

賞ですので、やはり現代的で研ぎ澄まされた表現方法が必要なのではないかと考えました。

『眺め』は現代的です。言葉のセンスはとても良いですし、洒落ている感じもします。あらすじを読んで描き出そうとするものの大きさに志の高さも感じました。いわゆる普通のドラマ演劇ではなく、抽象的な、感覚で捉えるような方向の作品なので、正直、どういう世界なのかよくわからなかったところがあります。ですが、読んでいて苦痛は感じなかったですし、むしろ心地よかったです。僕は「即物的な世の中で、そしてそれがどんどん加速していきありきたりの言葉や物語ではその価値観をひっくり返すことができないことに絶望を感じた作者が、それでもなんとか希望を届けるのはこの物語だ」とひねり出した作品だと思いました。こう書くと、僕は『眺め』を強く推したような感じがしますが、選考会が始まるとだんだんと消極的になっていきました。『モルヒネ』で指摘した、僕が技術的に引っかかったところなどどうでもよく思えてきたからです。『モルヒネ』には圧倒的な切実さとリアリティがありました。では『眺め』にそういうものを感じたのかというと『モルヒネ』ほどではないなと思ったのです。僕は昔から戯曲を書くのが下手くそでしたし、今でもそう思っています。自分がコンプレックスに感じていることほど目につくもので、ですから僕は技術的なことにまず目が行くのだなと改めて気づきました。ただ、技術的なことは些末なことです（もちろん大事なことは大前提として、です）それよりも何をどのくらいの切実さで描こうとしているかがその戯曲の魅力になるのだと思います。そういえばカラオケが上手に歌える人がみんな歌手になれるわけではありませんものね。ごく当たり前のことですが、戯曲もやはりそうなのではないでしょうか。

さて、他の三作品にも触れておきたいと思います。『甘い手』上手に書けていると思いました。きっと実際の上演を観たら楽しい2時間を過ごせるのだろうなとも思いました。笑いの作り方も上手だし、テンポよく進んでいくストーリー展開も小気味よいです。が、「本当の自分」というテーマは、切実さという観点で言うと作者にとってはあまり切実ではないのかな、と感じました。話をまとめるために使った小道具の一つなのかな、と。切実にこれが描きたいのであれば、もっと深い見方や作者なりの言葉が出てくるのではないのでしょうか。

『カドがとれて、遠くなって、白くなって、夏』最初、会社の同僚たち（男性一人に女性二人）と一緒に住もうかという話をしているところから始まります。シェアハウスもの、というジャンルがあるかはわかりませんが、結局一緒に住んであれこれ……という会話劇です、と思いきや、途中から抽象的な世界に入っていきます。前半はリアリズムの顔をして後半は不条理劇みたいになっていました。技術的なことは些末なことと先に書きましたが、この作品に関しては技術が追いついていないように感じました。リアリズムから入って夏の蜃気楼のような（作者がそういうイメージと語ってくれました）世界へ連れていくためには、手練のガイドでないと途中で「もう結構です」と引き返したくなるかもしれません。

『漣—さざなみ—』この作品も上手に書けていると思いました。けれどなぜ宇宙でなければいけないのか、僕には感じられませんでした。登場人物表17名それぞれに個性と役割を与え、ちゃんとストーリーにも絡ませ、最後上手にまとめ上げるその技術力は高く評価され

てよいと思います。が、あれもこれもとまとめることで薄まってしまったようにも感じられます。自分の研究か家族かという美空の選択、そしてケイトとの関係は矛盾なくまとまっているように見えますが、そんなあっさり済む問題かな、と感じてしまいました。この部分だけに着目して執拗に描けば、それこそ『モルヒネ』のような強度のある作品ができるかもしれないと感じました。それが作者の描きたいものかはわかりませんが。